

鉱山地質技師であった父と めぐるチリ —アンデスに魅せられて

関 啓子（一橋大学 名誉教授）



拙著『超時空通信』の成り立ち

チリのサンティアゴに着いて憧れのアンデス山脈を見上げた時、まるで「お帰りなさい」と温かく迎えられたような気がした。それまで一度もチリを訪れたことがないというのに。

それにはわけがある。チリ訪問は、長い間の私の念願であった。それも、たんなる観光が目的なのではない。チリは、私の父が働き盛りの8年間で鉄鉱山開発のために捧げた地であったからである。父は、鉱物資源調査を行う鉱山地質技師で、アタカマ砂漠での鉄鉱石の探鉱に成功し、資源開発にかかわった。

小中学生時代、私の日常生活に父の姿はなかった。父は地球の反対側でどのように暮らしていたのか、いったいアタカマ砂漠とはどういうところなのか。その後も長い間、この問いが消えることはなかった。そうしたなか、幸いにも父が遺した「手記」が見つかった。それを味読し、関連文献をひもといてみると、目の前に新しい光景が浮かび上がってきた。それは、いわば名もなき庶民の人生に体现された日本の昭和史であった。

そこで、波乱万丈の戦前・戦中・戦後を生き抜いた世代の体験とその意味を、一人の鉱山地質技師のライフストーリーとして描いてみたいと思った。更に、父がさりげなく会話の中で触れたラテンアメリカについての印象や所見を、私

なりの視点でとらえ直し、自身の現地訪問によって見聞きしたことも加えてレポートを作り、これを天国の父宛ての手紙に添えるという構成を考えてみた。この作業は、言ってみれば、娘が父親の生の軌跡を「引き継ぐ」ことであった。こうしてできあがったのが、拙著『超時空通信 一鉱山地質技師であった父とめぐる中南米』（新評論、2023年）である。

父の「手記」と関連文献とラテンアメリカ訪問（メキシコとチリ）とによって霧が晴れたかのように開けてきた世界について、ここでは述べてみたい。

アタカマ砂漠での鉄鉱山開発 —鉱山地質技師の昭和史

最初に、父のチリでの仕事と生活について若干触れることとする。父がチリへと向かったのは、1956年であった。三菱鉱業から派遣された、鉄鉱石開発事業の先遣隊の一員としてであった。羽田空港の出発ロビーを埋め尽くさんばかりの人びとが、万歳三唱で父たち3人（そのうちの一人は三菱商事の社員）を見送った。見送りの盛大さは、あとから考えれば、彼らの出発が三菱鉱業と三菱商事の社運をかけた事業への第一歩であったためであり、日本の経済成長の鍵を握る鉄鉱石の開発輸入にかかわる、期待の一大事業であったからである。

父たちは、運よくチリ北部のア

タカマ砂漠のなかほどに宝の山を探し当てた。「ラス・アドリアニタス鉱床」の発見である。付近は海拔1000m級の山地で大小の砂丘があるが、幸いオアシス都市コピアポに近かったのも、そこをベースキャンプにして、本格調査・会社設立準備・操業段階に取り組んだ。1959年には三菱鉱業と三菱商事との折半出資により「チリ・アタカマ鉱業有限公司」が設立されている。

当時、チリに住む日本人は約500人。派遣された人びとにとって仕事も生活も手探り状態であった。「天空の砂漠」と言えば、ロマンがあるが、実際は「乾燥度世界一」とも言われるアタカマ砂漠、調査地としてはすこぶる手強いのだ。ジープはもとより、ウマ、ラバ、ロバの助けを借りなくては移動もままならない。良質で採算のとれる鉱山を見つけるだけでも至難だが、開発となれば、鉱石の積出港の建設までを含む多様な課題の解決が必要となった。

「手記」や「社史」や他の研究によって浮上してくるのは、三菱系両社の勇断である。『三菱商事社史』には、アタカマ鉱山の開発は「危険を負担した本格的な海外鉱山開発の第一号であり、わが国の鉱石専用船大型化の先導の役割を果たしたプロジェクトであった」とある。海外資源開発プロジェクトにかかわるにあたって、アタカマ鉱業が融資買鉱方式でなく開

発参加方式をとったことは日本における先駆的な試みであった。開発輸入プロジェクトへの融資承諾額が10億円を超えたのも、アタカマ鉱業が最初であった。

拙著が描いた世界は、チリにおける日本による本格的な資源開発の黎明期の実態である。父たちがフロントランナーではなかったか、と教えてくれたのは有名なラテンアメリカ研究者だが、そうであることが客観的資料によっても裏付けられた。

海外開発事業についての研究は、大所高所から取り組まれ、多くの研究書・論文もあるが、そこからは働く人たちの息遣いはあまり聞こえてこない。現場の実態と開発の過程については、それに従事した企業の社史が詳しいが、それらは、開発に従事した人びとの生の姿を描くことを目的にしたものではない。拙著では、日本の戦後の経済復興を支えた資源開発について、調査から開発までかかわった一鉱山地質技師の目を通して、できるだけ現場目線で綴ってみようとした。

いまや高度経済成長も遠い昔のこととなり、日本経済をGDP第2位までに押し上げた人びとも、今ではワーカホリックと一蹴されかねない。だからこそ、当時、企業がどのように海外開発計画を立て、現場がどのような難問を抱え込み、それらを解決して、日本にとって死活的な鉱物資源を確保したかを少しでも明らかにしておきたかった。

フロントランナーと言えは聞こえはよいが、実際に開発に従事した人びとは、労働ばかりでなく、生活の面でも想定外の苦労を余儀なくされた。長期海外滞在者に

とって「水」と「食」の調達は重大な課題だ。父の「手記」には、当時の「食」についても詳しく書かれ、当地の日常生活が手に取るようにわかる。例えば、どのような魚が獲れ、どのように調理し、何がおいしいか、などが書き残され、読んでいて思わず生唾を飲み込んでしまう。

父は、漁港や市場、農家などを訪問調査し、文献資料にも当たって、当時のチリの農業と漁業の実態を丁寧に叙述している。また、資源調査の最中に出会った動物たち（コンドル、リヤマ、アルパカ、ビクーニャ、グワナコなど）についても学術書に当たりながら、その生態を調べ、「チリの博物誌」（草稿）を書き残している。そこには、当地の人びととの温かな交流も記されている。チリ（ペルーを含む）の動物と植物、それらにかかわる人びとの生業を調査し、チリをチリたらしめている生きものたちと人間との関係が、これらの遺稿から浮かび上がってくる。

拙著では、父の鉱山地質技師としての矜持の原点を探ろうと、その生い立ちに遡り、地質研究者になる過程を追った。すると、戦前・戦中・戦後を、国家政策のもとで翻弄され続け、命がけで家族のために時代を駆け抜けた世代の生き様が浮き彫りになった。父は戦時中に、娘と息子を病気で失っている。父のようになりたいという願いを口にしていた息子は、父が戦地から帰国した時にはもうこの世にいなかった。拙著では、個人的なライフヒストリーを通じて、血の通った昭和史のほんの一部分でも描いてみようとした。

持続可能な社会を目指して

ーラテンアメリカが示すヒント

ラテンアメリカはいろいろな魅力を秘めている。父が語っていたラテンアメリカについてのいくつかの印象や所見を手掛かりに「手記」や関連文献を読んでみると、これまで気づかなかったラテンアメリカのポテンシャルが、地球社会の存続にとっての光明として浮かび上がってきた。

ポテンシャルを感じさせるラテンアメリカの魅力について述べてみたい。その一つが、「チャク」である。これは、父の「手記」ではビクーニャにかかわる記述に含まれていた。ビクーニャは、ラクダ科の野生動物だが、その毛は黄金の毛とも言われ、珍重されてきた。祭りの時だけ捕獲し、毛を刈って再び放す「チャク」という手法が、インカ時代に皇帝の指揮のもとで行われていたが、インカ帝国が滅亡すると、一気にビクーニャの濫獲が始まった。激減した頭数をめざましく増加させたのが、新しい技術も取り入れた「チャク」の復活であった。地球上で絶滅危惧種がすさまじい速度で作り出されている現在、これは、野生動物の持続可能性を保証する方法をめぐる示唆に富んだ事例である。

父は、考古学が趣味ということもあり、アンデス文明に魅せられていたようで、「手記」に綴るばかりでなく、折に触れ語ることもあったので、私自身も拙著の執筆を通していっそうアンデス文明の魅力に引き込まれていった。その魅力の一つは、現代社会が抱え込む問題を解決するための示唆、すなわち、持続可能な社会づくりを目指す方途がそこに潜んでいることにある。経済成長戦略が最優先

されるなかで拡大した社会のひずみ、格差や差別に苦しむ人びとの生きにくさの抜本的な解決に資する要素がそこに感じられるのだ。端的に言って、自由で平等な社会をどうすれば目指しうるかという問いに答えるキー概念を、先住民の暮らしぶりのなかに見出せるように思われる。

アンデス高地での先住民共同体の農民は、高度差のある高地で農業を行うが、気候が厳しく、耕期が短いため、親族間を中心に労働の社会的交換を自由意志と相互信頼に基づいて行う。労働の交換、労働と土地利用権の交換、高齢で働けない人に対する無償の労働提供など、多様な社会的交換が組み合わされて、相互扶助にもとづく定常型経済が実現している。先住民共同体の人びとの間では、生業維持に不可欠の自発的な相互扶助と平等化を目的にしたアソシエーションが作られている。この相互扶助のシステムには、平等で自由な社会づくりのコアとして、現在注目されている「コモン」の原初形態が見られるとも言えよう。

ただし、上記の先住民社会は、住民の移動、また外部経済圏からの働きかけや揺さぶりに対して耐えられるかどうか、という大きな問題を抱えている。

私にとってのラテンアメリカのもう一つの魅力は、彼の地で普及している「社会的連帯経済」と、その理念的基盤を提供したとされるパウロ・フレイレ（1921～1997）の教育思想である。

ブラジルを離れたフレイレのチリでの亡命生活は、アジェンデによる社会主義政権への平和的な移行を前にした1964年から始まった。彼はチリ革命に向かう民衆の

息吹を実感する。フレイレは、民衆の学習運動をつぶさに調査し、その自発性と主体性、自己の問題を自分の言葉で表現し、討議を重ね、解決を模索する姿に感動した。このチリでの経験があったから、主著『被抑圧者の教育学』¹が完成した、と自身が告白している。この書で彼は従来の教育理念をひっくり返した。伝達される知識の習得量をあたかも銀行預金の残高証明のようにして競い合う従来の「銀行型教育」を否定し、学習者が問題を自分の言葉で話し、批判的考察を加え、対話を介して課題を究明し、解決を考える「課題提起教育」を主張したのである。

「連帯経済」（「社会的連帯経済」）という用語は、1990年代にラテンアメリカ諸国で使われ始め、「世界社会フォーラム」などの運動によって国際的に広まった。それは、市場自由主義に抵抗し、地域社会の市民自身による経済活動を重視する。人類の生活様式を根本的に変え、「自由、平等、連帯のベストミックス」を求める動態社会を築こうというのだ²。「連帯経済」の理論と運動は、社会問題と環境問題の両方に取り組み、参加者は自らの

足元の問題に気づき、討論を重ねて問題解決を目指し、「善き生活」、「精神的に満ち足りた生活」を築こうとする。そしてこうした行動する主体の形成に、自主性と対話を重視するフレイレの教育思想が大きな役割を果たしている³。

「社会的連帯経済」に代表される、ラテンアメリカに息づく革新的な理念や民衆の運動は、すべての人びとの「善き生活」を目指している。彼らは基盤となる自身の文化を大切にしながら、批判的精神と想像力や創造力をフル稼働させ、すべての人にとって生きやすい新しい社会を模索している。世界を牛耳る強大な力の存在を知りながら、ひるまずに快活・果敢に挑むラテンアメリカの民衆の動きにこれからも注目していきたいと思う。

- 1 パウロ・フレイレ（2011）『新訳 被抑圧者の教育学』三砂ちづる訳、亜紀書房。
- 2 富沢賢治（2019）「社会的・連帯経済の思想的基盤としてのボランニーとオウエン」『ロバート・オウエン協会年報』参照。
- 3 廣田裕之（2016）『社会的連帯経済入門 ―みんなが幸せに生活できる経済システムとは―』集広舎、参照。

（せき けいこ 一橋大学 名誉教授）



チリとラテンアメリカのポテンシャルの実現を託される子どもたちの今。学校での学習風景。子どもたちの明るい快活さが教室に活力を与えている（藤枝康子氏撮影）